

唯物史観より人口史観へ（Ⅴ）

——ヘーゲルと人口哲学——

別 府 芳 雄

まえがき

前章ではマルサスの歴史観について述べた。マルサスの『人口原理論』（または『人口の原理』あるいは、単に『人口論』ともいう）は——表題こそ『人口原理論』（An Essay on the Principle of Population）となっているものの——じつは歴史哲学の書物であって，“人口原理”すなわち増殖原理と規制原理（テーゼとアンチテーゼ）の弁証法的展開から人間歴史の神秘の謎を究明しようとした歴史哲学の書物であることを述べた。〔われわれは長い間、誤解してきた。マルサスの『人口論』という表題にとらわれて——マルサスが人口と食料との対比関係のみを論じたものと早合点していたが——そうではなく、ボナー（J. Bonar）が確言したように、『人口原理論』は“諸国民の貧困に関する研究（An Essay on Inquiry into the Poverty of Nations）”であったのみならず、マルサスが人口を武器（道具）として“社会将来の改善（the future improvement of society）”のヴィジョンのもとに——人口を手段として人間歴史を解明しようとした歴史観を披瀝した書物であった。〕いいかえると、マルサスは『人口原理論』という表題を用いて、人間の増殖原理を起動因として歴史を解明しようと試みたものであって——俗に考えられているように単に“人口”（人口対食糧の対比関係）を論じているのではない——ということを述べた。マルサスは“人口”を武器として使った（B. ラッセル）のであり、人間の増殖

(＝人口増加)を起動因として歴史をみるということは、つまり彼が人口史観を抱いていたということである。繰り返していうが、マルサスの『人口原理論』はマルサスの歴史観を示した歴史哲学の書物であった。マルサスは経済学者であったのみならず歴史哲学者でもあったのだ。南先生が述べられたとおり『人口原理論』とは「帰するところマルサスは、人口と生存資料との間における……均衡……均衡破壊……均衡回復……再び均衡破壊……という運動過程の繰り返しとして人間社会の歴史を解明しようと試みた」(『人口論五十年の後』85ページ)ものであった。

ところで、マルサスと同時代人であり、同じくフランス大革命の影響を隣国人として受け——しかも同じく弁証法的歴史観を考え出した哲学者にドイツの大哲学者ヘーゲルがいる。ヘーゲルはマルサスより4歳年下である。

まず、わかり易いイッポリットの表現を借りると「ヘーゲルの思想はまさに人間の生命についての思想であり、生命の自覚であって……ヘーゲルの弁証法がつくり出されたのは、この歴史とこの人間の生命とを理解するためなのである」(J. Hyppolite, *Studies on Marx and Hegel*, p. 16. f.), 「子供の生はその両親の死である」(p. 11), 「個体それ自身は生きている限り、そのなかで契機(動因)がたえまなくのり超えていく(transcend)流動性である」(p. 10), 「おのこの特殊な生命体は、生命の全体性(the totality of life), つまり普遍性(the Universal)をまさにそれ自体において表現する。それゆえに、それは他の生命体を生み出すことによって死ぬのである。普遍的生命の運動は、この止まることのない、しかも単調な“死と誕生”(Death and Birth)のなかに現われる」(p. 26)。かくて「生命の諸契機は、歴史の形で展開されていく」(p. 13)ことになるのだと。——してみるとヘーゲルは人口史観(およびその理念としての人口哲学)を構想していたことになる。周知のように、ヘーゲルの弁証法的発展は、“有”(存在)から本質をとおして目的へと進むものである。ヘーゲルは『精神現

象学』において“生”（レーベン）を論じ、また『大論理学』および「小論理学」（『エンチクロペディー』の第1部も論理学となっているので、これを「小論理学」と通称する）において“生の生産と再生産”を論じ、種の繁殖（＝人口増加）が世界史の契機（起動因）をなすと論じている。生命は個人としてみると有限（非連続）なものだが、歴史とは、この非連続の連続だと述べている。（これはまさしく人口史観である。）また生命の絶えまない“向自有”（Fürsichsein），“生”の真無限（die wahrhafte Unendlichkeit）〔無限増殖〕のイデーとは、ヘーゲルの人口史観をつらぬく人口哲学そのものではないか！

われわれは同じ時期に同じヨーロッパで、同じくフランスの隣国としてフランス大革命のインパクトをともに受けたイギリスとドイツで、同じく人口史観が述べられるにいたったことに注目すれば——ヘーゲルの弁証法的歴史観の形成について、マルサスのそれと対比して考察する必要がある。しかしルカーチのいうとおり「フランス革命のドイツにおける影響の歴史は、まだまだ十分に研究されていない」（G. Lukács, Der junge Hegel, S. 24）——のだからヘーゲルの歴史観形成についてマルサスとの対比は容易ではないが、ヘーゲルの人口哲学成立過程を解明することは、マルサスのそれに肉迫する踏み石となろう。本章はヘーゲルの人口哲学のみを照明することを目的とする。

ヘーゲルが彼の哲学体系を構想したのは、彼がフランクフルト・アム・マインで豪商ゴーゲル家で家庭教師生活を送っていた時代であり、ルカーチによると、“フランクフルト Frankfurt (1797 bis 1800) 時代”だという。すなわち「ヘーゲルは3年間スイスのベルンで暮らしたのち、ドイツに帰って……ドイツの商業中心地の1つフランクフルトで生活する。したがって彼は、ドイツの生活に対するフランス革命の影響を直接に近くで観察する可能性を得る……フランクフルト問題 (Frankfurter Probleme) 〔後述〕の終末のころ、彼は生涯で初めて自己の哲学的見解 (seine

philosophischen Anschauungen) を1つの体系 (ein System) にまとめあげる試みをした」(Lukács, S. 138 f) のだと。1797-1800年といえ、何とマルサスが初版『人口原理論』を公刊した時期ではないか！(1799年には、ゴッドウィンの『研究者』が出版されている。この著作こそ、マルサスをして初版『人口原理論』〔1798年、序文6月7日〕を執筆せしめた原因となったものではなかったか！)。またディルタイ W. Dilthey (1833-1911) は「ヘーゲルが彼の歴史研究を新しい歴史観のもとに包括したのがフランクフルト時代で、この構想（歴史観）が完成したのは、どうみても明らかにイエナ時代の初期であって——正確にいうと“だいたい1802年の夏にはすでに確立” していて、部分的には執筆がおこなわれていた」(W. Dilthey, Die Jugendgeschichte Hegels, S. 127) のだ、と述べているが、だいたい、この頃の時期（1797-1802年）に彼の歴史観を確立しおわっていたものと考えられよう。1802年の夏といえ、何とマルサスが『人口原理論』の第2版を公刊〔1803年6月〕した前年ではないか！（マルサスが第2回大陸旅行、フランスおよびスイスに赴いて、資料を蒐集したのが1802年）。してみると、この時期に奇しくも人口史観が2人の哲人によって想到されていたのだということになる。（断っておくが、マルサスもヘーゲルも人口史観などという名称を用いたことは全くない。人口史観という構想は亡き南亮三郎先生の終生の悲願だった構想である。）★

★ 南先生は書いておられる——人口論と哲学、その結びつきはないものでしょうか。ことに今日のように人口政策の論議がさかんになると一層その必要を感じます。いわば“人口哲学”といったような新たな学問世界が開かれるように思います。しかし、私の場合、日はすでに西に没しようとしています。（『人口論五十年の後』18ページ）。わたしは最後の置きみやげに“人口哲学”（Population Philosophy）なるものを構想したい。殊に“人口”がさまざまな分野での探究とともに人為的政策の対象となるのは“人口哲学”であろう（『人口論六十年』92ページ）。——と。

詳しく調べていくと——マルサスもヘーゲルもほぼ同じ年頃にギボン Edward Gibbon (1737-94) の『ローマ帝国衰亡史』(The History of the Decline and Fall of the Roman Empire, 6 巻, 1776-88) を読み, ほぼ同じ頃にステュアート James Steuart (1713-80) の『政治経済の原理』(An Inquiry into the Principles of Political Economy: being an Essay on the Science of Domestic Policy in Free Nations, 全 2 巻, 1766) を読み, アダム・スミス Adam Smith (1723-90) を読み, 共に若き日にフランス大革命とその後の政治的・社会的現実の推移を体験している。1806 年は, ナポレオンのイギリスに対する大陸封鎖 (Blocus Continental) が行なわれた年であるが, ヘーゲル (36 歳) が『精神現象学』(Phänomenologie des Geistes, 1807) を書きおえた年でもあり, (ナポレオンは 1806 年 10 月 13 日イェナに侵入), マルサス (40 歳) が『人口原理論』第 3 版を公刊した年でもあり, 千年も続いた神聖ローマ帝国が解体した年でもある。してみると, この 2 人の哲人 (驚くべき知識と天才的な卓見をもったマルサスとヘーゲル) が, きわめて類似した社会的・政治的環境のなかで, 類似した歴史観を抱いていったものと考えられよう。★

- ★ フランス大革命や産業革命によって現実化されたブルジョア社会は, これまでの啓蒙史観が描くような理想状態ではなくて, それ自体多くの矛盾を孕み, その矛盾によって動いていくものであった。市民社会は確かに人間がつくったものである。だが, それは人間の手から離れて客観的に孤立し, それ自体の合法則性に従って運動するから, 人間は, 社会の必然的な法則の世界にまきこまれていく。だから, 人間はこの迫りくる自己を否定する社会を再び否定しようとする。(否定の否定)。ヘーゲルにしてもマルサスにしても弁証法的歴史観のモチーフは, こういう社会的環境下で生れていったに違いない。

本節Ⅰではヘーゲルの生涯と著作について概要を述べ, Ⅱにおいて, ヘーゲル哲学体系のなかにしめされているヘーゲルの“人口哲学”について述べてみたい。亡き南先生が終生の悲願とせられた“人口哲学”が博識

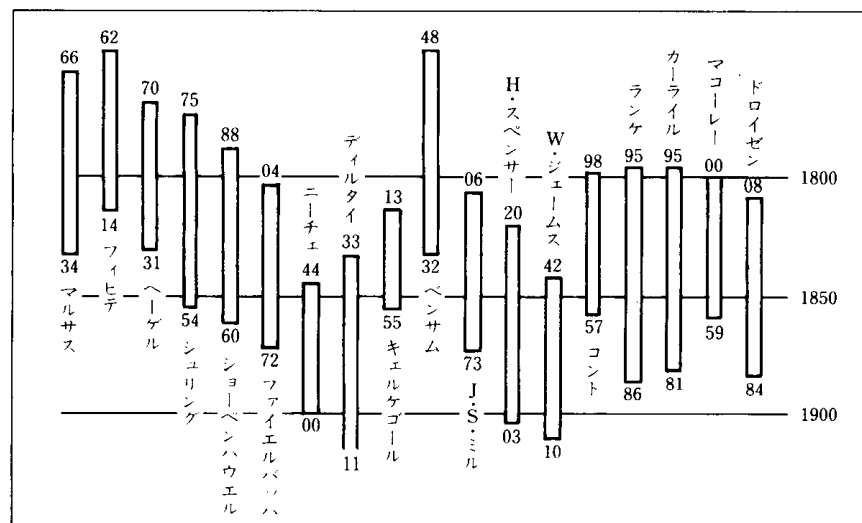
のヘーゲル哲学体系のなかでどのように叙述されているか究明してみたい。★

★ 南先生の「世上に流れる人口削減の俗論は、人口はただ養わねばならない厄介物だという考え方と結びついている……不断の人口増加は進歩の動源であり、経済発展の拡大努力への最も強靱な^{こうかん}楯杆である」（『人口論五十年』25-6ページ）、「人口の存続がなくて、その人口の幸福も繁栄もあり得ないでしょう……“人口”は永続しなければなりません」（『人口論五十年の後』130-1ページ）——とは、ヘーゲルの“生命”哲学の根幹をなす哲学思想でもある。

I ヘーゲルの著作と生涯

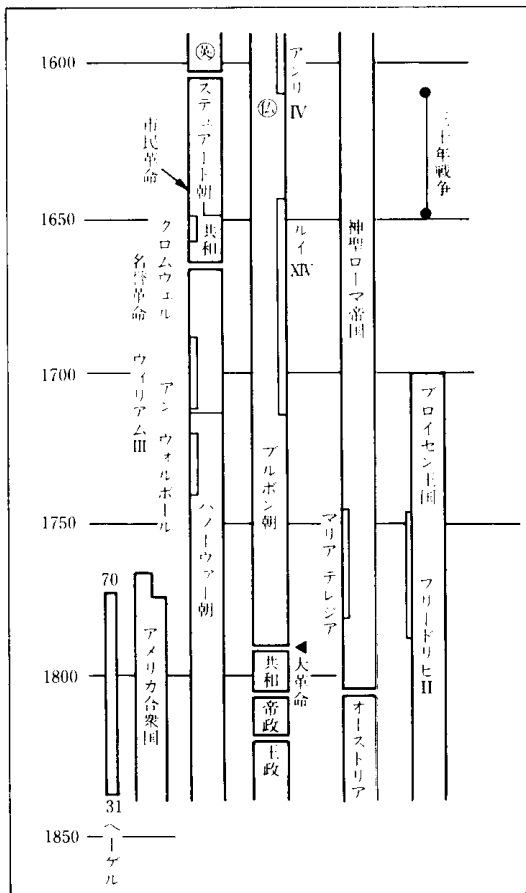
マルサスとヘーゲルは同時代人であり、ヘーゲルはマルサスより4歳年下である。（下図1参照）。ヘーゲルは1770年8月27日生れで、1831年（この年はパリ7月革命の翌年にあたる）11月14日、アジア・コレラのため急逝（行年61歳）。マルサスは1766年2月13日生れで1834年12月29日、妻の実家クラヴァトン（Claverton）のエッカソール家で“楽しいクリスマスをすごすため”出かけて行って急逝（行年68歳）したのだから、ヘーゲルはマ

図1 19世紀の文化人 哲学・歴史学



（出所）山口修『年表世界史』94ページ

図 2



（出所）山口修 78 ページ。

ルサスより遅く生れて、しかも 3 年余も早く世を去ったことになる。しかし兩人とも、国を異にし、時代を同じくして、19 世紀の 30 年代まで生き続けたことは、前頁図 1 の年表の示すとおりである。イッポリットのいうように「ヘーゲル哲学の全体が、他の多くの哲学体系より以上に、どの程度、当時の政治的・社会的事件（the social and political events of the day）に由来するかが問われなければならない¹⁾」とすれば、——ヘーゲルの哲学体系確立までの歩み——政治的・社会的事件との関連で——ふれておく必要がある。

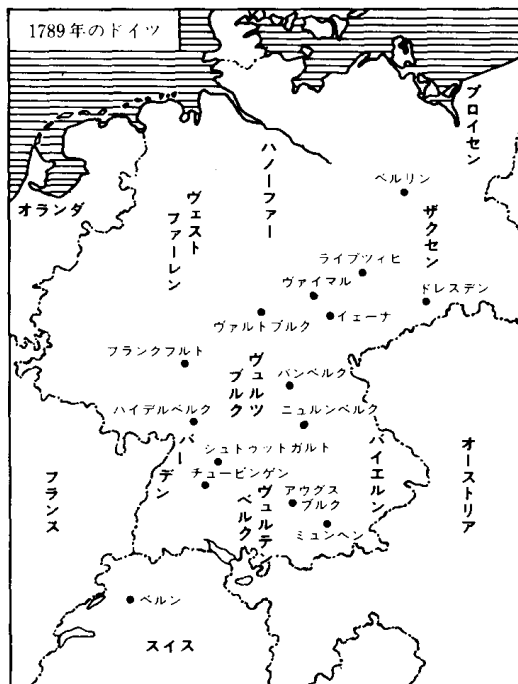
「まことに絶対主義王朝の隆盛と滅亡、自由主義や民族主義の勃興、産業革命とそれに続く経済的・社会的な変動、旧秩序と新秩序、反動体制と自由主義の抗争、貴族の社会からブルジョアの社会を経てプロレタリア社会の形成へ、貴族的国際文化から市民的国民文化へ、こういうドラステックな変化が、時には踵を接し、時には重なり合って、この時代を形作っている²⁾」状態であって図示すれば上図 2 のごとくである。（上図 2 からイギリス、フランス、オーストリア、プロイセンその他の国々の政治的変化の事情を知りうるのみでなく、ヘーゲル生存中に、フランス絶対王政が大革命によって、共和政——帝政——また王政——へとめまぐるしく転換していることがわかるし、また 1806 年に神聖ローマ帝国が崩壊したこともわかる）。このような複雑した政治的・社会的現実が若きヘーゲル（むろんマルサスにも）に吸収され、思想のなかに

消化されて，哲学として結実していったものであろう。ゲオルグ・ウィルヘルム・フリードリヒ，ヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel）は1770年8月27日に南ドイツのヴュルテンベルク公国の首都シュトゥットガルト（Stuttgart）の都心から程遠からぬエーバーハルト通り（Eberhardstrasse）53番地で，ヴュルテンベルク公国の財務官（Rechnungsbeamte）の子として生れた。ヘーゲルは長男である。★

★ ヘーゲルには2人の弟妹がいた。弟のルードウィヒ（Ludwig）は士官の道を扱んだが，兄より先に独身のままに亡くなった。同じく未婚のままでいた妹のクリスティアーネ（Christiane）は，長年にわたってうつ病を患っていたが，兄の死後ほどなく入水自殺している。また母のマリア・マグダレーナ（Maria Magdalena）はヘーゲルの14歳時（＝1783年9月20日）に死亡している。

彼の家庭は典型的な中産階級に属し，シュヴァーベン地方特有のプロテスタントの敬虔な信仰と内面的誠実を核心として，質実な生活を営んでい

図 3



（出所）G. Biedermann, Hegel.

表 1 17, 18世紀における

ヴュルテンベルクの人口

年 次	人口(千人)
1598	414
1622	445
1634	415
1639	97
1645	121
1652	166
1669	218
1673	252
1679	265
1697	284
1730	425
1750	472
1794	614

（出所）G. Mackenroth, S. 117

た。1789年当時のヴュルテンベルク公国の地理上の位置は前頁図3に示すとおりである。またヴュルテンベルク公国の人口は、1771年（ヘーゲル2歳時）において約48万人であった。また前頁表1は、17、18世紀におけるヴュルテンベルクの人口を示したものであるが、いかに激しい増減があったか（波動を描いているか）を明瞭に知りうる。

ヘーゲルはシュヴァーベン人（ein Schwabe）であり、シュヴァーベンなまり（schwäbischer Dialekt）とシュヴァーベン気質は生涯ヘーゲルから離れることがなかった。物事に没頭して我を忘れてしまうということからくる鈍重さ（Unbeholfenheit）は生涯彼から離れることがなかった。★

★ ディルタイはいう——ヘーゲルのシュヴァーベンの人的気質（die schwäbische Stammerart）はシラー（Schiller, J. C. F. 1759-1805）やシェリング（Schelling, F. W. J. 1775-1854）の場合より遥かに強く出ているようである、と。（W. Dilthey, Die Jugendgeschichte Hegels, S. 5）

ヘーゲルはこのシュヴァーベン気質をもったまま、深く掘り下げていく思想家（in die Tiefe bohrender Denker）として成長していく。

（1）ギムナジウム時代（1777-1787）

ヘーゲルは7歳のとき、シュトゥットガルトのギムナジウム（das Gymnasium in Stuttgart）に入学し、1787年まで10年間在学した。「1785年6月26日から1787年1月7日までの間ではあるが、ヘーゲルは草稿用紙をキチンと重ねて綴じた4つ折版のノートに、一種の日記ともいふべきものをつけているが……この日記の記事の顕著な特徴とみなさるべきものは、歴史の概念に絶えず繰り返し戻ってゆくヘーゲルの傾向³⁾」であった。★

★ ヘーゲルは天性、歴史的感覚（geschichtlicher Sinn）に恵まれていたようである。驚くべき知識（ein staunenerregendes Wissen）、それに本質的なものと

隠れた関連に対する驚嘆すべき眼光 (ein frappierender Blick) をもっていた。これはヘーゲルの特徴で、彼が弁証法的図式 (sein dialektisches Schema) を適用するばあい、論理的一貫性ととともに、壮大な完結性の絵画となっていたものである。(H. J. Störig, Kleine Weltgeschichte der Philosophie, S. 324.)

その日記はまったく杓子定木のものではあったが——彼が彼の研究した事項を書きとめていることに注意する必要がある。とくに彼が古代と歴史 (Altertum und Geschichte) を身につけようとしていた点が注目される。★

★ ギリシア人に対する感激 (die Begeisterung für die Griechen) は生涯を通じてヘーゲルの心から離れなかった。

デイルタイは「とりわけヘーゲルの心をとらえていたのは、歴史の哲学的理解の問題 (das Problem eines philosophischen Verständnisses der Geschichte) であった。彼はその当時すでに、18世紀の普遍的哲学的歴史記述の方法 (die Methode der universalen und philosophischen Geschichtschreibung des 18. Jahrhunderts) を身につけていた⁴⁾」のだ、という。★

★ 若きヘーゲルは日記に以下のごとくしている「実際の歴史とは、思うに、もし、それがたんに事実を説明するだけでなく、有名な人物の性格や国民全体の性格、その風俗、習慣、宗教等々、そして他の民族におけるこれらの事柄のさまざまな変化と偏奇とを展開し、偉大な帝国の崩壊と興隆とを追体験することであるとするならば——そのことは、あれこれの出来事と国家の変遷が国民の状態やその性格等々やその結果にたいしてもつものはなんであるか等々を示す」と。——ということは、「ヘーゲルが歴史を個々の現象や主観的な恣意や君主たちの勝利と敗北のつなぎ合わせとみる考えかたを追放していることである……偉大な人物と国民全体の性格に、その風俗、習慣に、歴史の原動力と偉大な国家の繁栄の原因その他をみる。そうしてすでにヘーゲルのギムナジウム時代に歴史主義の基礎がおかれた」ということを意味する。(ビーダーマン『ヘーゲル』10-11ページ)。

もとより、当時の少年ヘーゲルにとっては、弁証法的方法について知るよしもない時期ではあったが、“歴史という巨大な素材”（das grössten Stoff der Geschichte）を彼が早くも問題意識として抱いていたことは注目に価する。その意識は大学での研究と家庭教師生活のあいだに拡大深化していくのだが——「世界史の哲学的理解を根本的に基礎づけること、これがカント以後の哲学の任務となったとき——そのために輩出した多くの首唱者（Stimmführer）のうちで、とりわけ（insbesondere）ヘーゲルその人に課せられた任務⁵⁾」となっていたものである。

なおヘーゲルはギムナジウムを模範生（Musterschüler）として通した。〔マルサスは公立学校には通わずバース付近の教区長リチャード・グレーヴス（Richard Graves 1715-1804）の私塾に通っている。〕

（2）神学校時代（1788-1793）

この時代のヘーゲルを2つの側面から考察する必要がある。1つは神学校に在学した“神学生”（Stiftler）として——2ヵ年間の哲学課程と3ヵ年間の神学課程を専攻した——ヘーゲルにとって、彼の弁証法的歴史観形成にどういう役割をもつのかということ、もう1つは、偶々在学中に勃発したフランス革命とその現実的進転課程がヘーゲルの思想形成に及ぼした影響という側面である。だからヘーゲルの生涯において「テュービンゲン時代は単なる1挿話（eine Episode）にすぎないとみるのは誤りのようで、じつはこの何年かの間に、やがて広汎な影響をおよぼすことになった諸決定がなされていた⁶⁾」のである。

まず、1788年10月27日（ヘーゲル18歳時）、ヘーゲルはテュービンゲン大学の付置施設の神学校（Tübinger Stift）〔16世紀に創立された〕に入学し、1793年9月20日卒業まで5ヵ年間学生生活をおくる。ヘーゲルは公国の給費生（herzoglicher Stipendiat）であった。★

★ ここで、ブルグベルグ (Burgberg) の山麓にある古いアウグスティヌス派の修道院 (das alte Augustinerkloster), つまり神学校 (Stift) がヘーゲルの環境となる。彼はここで5年の多感な歳月を過ごすわけだが、ヘーゲルの出発はまず“神学生” (Stiftler) であった。

この神学校はルター派正統主義 (lutherische Strenggläubigkeit) の立場に立っている学校で、保守的なヴュルテンブルグ公国のイデオロギー的な支柱であって“最初の2年間は主として哲学研究に、あとの3年間は主として神学研究”ということになっていた。ヘーゲルは哲学課程2年修了後、1790年9月22日に哲学マギステル (Magister der Philosophie) を取得している。詩人ヘルダーリン (Hölderlin, F. 1770-1843) はヘーゲルと同年生れで、入学も同年だったから、1790年には学寮も同室で生活した。またシェリング (Schelling, F. W. 1775-1854) はヘーゲルより5歳年下であったが、1790年秋に、[2年おくれて] この神学校に入学してきた。シェリングは入学した時には、まだ16歳にも満たなかったが“早熟の天才” (ingenium praecox) であった。こうして、ヘーゲル、ヘルダーリン、シェリングは学寮で“同室の仲間” (Stubenkameraden) であったことがある。★

★ ヘーゲルは友人たちから“老人” (der alte Mann) と呼ばれた。友人ファロット (Fallot) の手になる記念帳 (Stammbuchサイン帳のこと) の1ページには、頭をたれ、杖をついているヘーゲルの姿が描かれてあって、それに“神よ、老人を守り給え” (Gott stehe dem alten Mann bei!) という言葉がそえてあったといわれる。友人たちは若きヘーゲルを老人とかお年寄り (der Alte) と呼んだ。

ヘーゲルは保守的な神学科の指導者シュトル (G. Ch. Storr) について神学の課程 (1790-93) を修了したのだが、学生たちは信仰的強圧に対して、むしろカントの“人格の道德的主権” (die moralische Souveränität der Person) を主張し、厳格な宗教的戒律づくめの宗教生活には反対だった。

というのは、カント I. Kant (1724-1804) の『純粹理性批判』(Kritik der reinen Vernunft, 1781) についての論議がヘーゲルが大学に入学した頃がほぼ頂点とみられるくらい論議されていた頃だったからである。次いでフィヒテ J. G. Fichte (1762-1814) の『知識学』(Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre) が1794年に刊行された——僅か数ヵ月後には、もうシェリングがフィヒテの立場を越えようとする著述を公刊しているが——ともかく、当時のヘーゲルは友人たちと一緒にカントに与（くみ）した。★

- ★ カントの『純粹理性批判』の第2版はヘーゲルが大学に入る前の年、1787年に出版されていた。『実践理性批判』(Kritik der praktischen Vernunft, 1788) は入学の年、1788年に出版された。彼がマギステルになった年に『判断力批判』(Kritik der Urteilskraft, 1790) が、さらに大学卒業の年に『単なる理性の限界内における宗教』(Die Religion innerhalb der Grenzen der blossen Vernunft, 1793) [これはカントの問題作であった] が出た。

彼はすっかりカントに心酔し、この傾向はのちのベルン時代 [スイス] に及ぶ。ヘルダーリンは1791年にヘーゲルの記念帳に“1にして全”(Ein und All) の文句を書き入れた。ヘーゲルとヘルダーリンの間の厚い友情はヘラス (古典ギリシャ) [民主的共同社会] に対する深い憧憬の共感であった。“1にして全”とは、古代ギリシャの箴言 (戒めのことば) で——宇宙における神性の現存という古代のギリシャの汎神論的考えを意味する。★

- ★ ヘルダーリン Hölderlin, F. (1770-1843) はドイツの詩人。ネッカー Necker 河畔のラウフェン Lauffen に生れて、1788年テュービンゲン神学校に入学し、ヘーゲルやシェリングと知り合う。1796年フランクフルト・アム・マインの銀行家ゴンタルト Gontard 家の家庭教師となったが、ゴンタルト夫人スゼット Susanne に熱烈な崇拜と愛情を捧げたが、そのため家庭不和をひき起し、同家を去る。彼がヒュペリオン Hyperion のなかで理想的な女性として描いたディオティマ (Diotima) はこの夫人をモデルとしている。1801年ボルドーに職を求めて南フランスを徒歩旅行中、精神錯乱の兆が現われ1804年以後全く廃人となる。

正統派神学と神学校の厳格な制度，そして，その両者を支えている故国
ヴェルテンブルクの保守的体制は学生たちにとって，まさに変革に価する
ものであった。のちにヘーゲルは親友ヘルダーリンの純粹“愛”による悲
劇を目撃して，カントの定言命法の形式性を批判することになるが
——「カント批判におけるこの動機によってヘーゲルは，自己の弁証法の
発展において，いっそう大きな前進の1歩をふみ出す⁷⁾」ことになる。

そこへ衝撃をもたらしたのは1789年7月のフランス革命勃発（ヘーゲル
が第1学年を終えた19歳時）とその後の動向であった。神学校では自発的
に政治クラブ〔フランス革命にかんする禁書を読む会〕が結成され，フラ
ンスの新聞が読まれ，自由の歌が口ずさまれ，事件が活発に論ぜられた。
ある日曜日の朝，美しく晴れた春の朝，ヘーゲルとシェリングとヘルダー
リンは数人の友人たちとともに，チュービンゲンの近郊の草原（Wiese）
に出かけて行って，そこに自由の木（Freiheitsbaum）を植えて革命歌
（ラ・マルセイエーズ）を唄って踊った。★

★ ヘーゲルにとっては，フランス革命は非合理的な現実に対する理性の勝利と
して受けとられた。現実が理性によって支配されるようになるとき，人間はみ
ずからを理性的なものへと高め，自分が自分の主人となる可能性が開かれる。
この意味でフランス革命は，カントの自律的自由の立場と結びつくものと受け
とられたのである。（城塚登「ヘーゲル」『人間の知的遺産』〔46〕昭和60年，70
ページ参照）

フランス革命は神学校の学生たちに理論的な，合理的な説明を与えたが
——それだけでなく，ドイツ民衆の自由への道をさし示す哲学への欲求を
もかきたてることになる。彼はこの課題を解く鍵がルソーの思想のうちに
あると考えて繰返しルソーを読破した。「ヘーゲルは，哲学上の恩師カン
トを尊敬するのと全く同じように，ルソーの著作を尊重した。ヘーゲルの
初期のテキストに及ぼしたルソーの影響は，カントと並んで何ととっても

最も重大なもの」⁸⁾なのであり、彼はルソーの考えを継承することによって民族宗教（Volksreligion）「自然宗教ともいう」の概念を展開することになっていく。（ルソーのいう超個人的な全体意志という概念は、民族精神と考えれば、民族宗教という概念が当然でてくる）。★

★ ヘーゲルは次のように考えた——「人間は本質的に罪深きものと説く原罪の教義こそ、ヘーゲルにとって、もっとも罪深きものであった。それは道徳的な無力感を蔓延させ、人間が本来もっている道徳的な情感を押しつぶす……むしろこうした抑圧から精神の力を解放することこそ、民族宗教の務めでなければならぬ」と。（山崎純『ヘーゲル読本』法政大学出版局，68-9ページ参照）

ということはヘーゲルの心に次のような問題が浮かびあがっていたことを意味する。すなわち「現行のキリスト教を，進歩しつつある宗教的道徳的文化の担い手となる民族宗教にまで育成することは，いかにして可能であるか」⁹⁾ということであった。

ここでハッキリ承認しておかねばならないことは——「注目すべきことは、ヘーゲルの場合、チュービンゲン時代からすでに、理論的なものや形而上学的なものよりも実践的関心が優先していたことである。ヘルダーリン、シェリングとは対照的に、彼は現在の状況の改善を目指す政治的な問題に関心」¹⁰⁾を抱いていたということである。周知のように、フランス革命によって提出されたにも拘らず、フランス革命によって解決されなかった問題こそ、自由の政治的実現ということであった。ヘーゲルはその自由というイデーを彼の哲学の“根本的基体”としていくのだからチュービンゲン時代におけるフランス革命勃発と革命の現実的推移がヘーゲルの歴史観形成におよぼした影響はきわめて深刻なものがあつた。

(3) ベルン時代（1793-1797）

1793年10月初旬、学業を終えたヘーゲルはスイスのベルンの名門カー

ル・フリードリヒ・シュタイガー (Carl Friedrich Steiger von Tschugg) 家の家庭教師となった。ヘーゲルは2人の娘と1人の少年 (フリードリヒ・シュタイガー) [この少年はヘーゲルが授業を始めた時7歳だった] の教育に当たった。★

★ 住込み家庭教師といっても、子供たちの教育だけでなく、屋敷や領地の管理の手助けもやっていたようである。(Wiedmann, S. 22) シュタイガーは哲学や歴史、政治学の多くの蔵書をもっていてヘーゲルもこれを利用できたようである。(S. 22) フランス革命は急激な進行を示していた。1792年9月、国民公会が発足し、フランス共和国が宣言された。ジャコバン党の独裁が成立し、公安委員会、革命裁判所が設立された。ロベスピエールの指導のもとに革命政府は恐怖政治を強行する。テロルは血なまぐささを増していく。1794年6月以後1794年7月までの49日間に1,376名が処刑された。この年(1794年)、フランスのパリでは、1月21日ルイ16世が処刑され、10月16日には王妃マリ・アントワネットが処刑された。またイギリスではウィリアム・ゴッドウィンの『政治的正義』が出版されている。(時にヘーゲル23歳、マルサス27歳であった)

ところで家庭教師時代 (Hauslehrerjahre) というのは、当時においては未来の聖職者や教師たちが経験しなければならなかった惨めな一時期ともいべきものであった。当時の家庭教師の地位は“高級下僕の地位” (die höhere Dienerstellung) に類するものであった。神学校卒業者としては、副牧師——牧師の道を歩むのが、いわば普通のコースであったが、ヘーゲルは“拙劣な雄弁家” (orator haud magnus) だったし、彼は“未来の哲学の教職”を希望していたから、さし当りの経済的準備を整えようとして家庭教師の道を選んだものであった。★

★ ヘーゲルが——「同じく家庭教師として、哲学者たる歴史をはじめた有名な先達であるカント、フィヒテ、ヘルバルトらにならったもの」(Wiedmann, S. 22) という説もある。

1794年にヘーゲルは再度カントに没頭した。★

★ ヘーゲルは神学校（テュービンゲン）時代にもカントの『純粹理性批判』からの抜き書きを作っているが、それと同様の、いくつかの所見を付した『実践理性批判』から抜き書きが今でも残っている。（ローゼン克蘭ツ，邦訳97ページ）

友人シェリングの「哲学の形式の可能性」（die Möglichkeit einer Form der Philosophie）の論文に対して、彼は強い関心を示し、彼がこの論文を入手した時、1795年4月16日の手紙でハッキリわかるように——彼には強いショックを与えた。この時期のヘーゲルの最初の論文は「イエスの生涯」（das Leben Jesu）であった。この草稿は1795年5月9日から7月24日にわたって書きおろされたもので、カントによって啓示を受けたところをとりあげたものであった。つまり「イエスの生涯」はイエスの宗教をカントの実践理性の宗教として証明しようとしたものである。同じ時期の別の草稿「理性宗教と実定宗教（既成宗教）との関係」（Über das Verhältnis der Vernunftreligion zur positiven Religion）〔1795年11月2日までに書きあげられ、残りの部分には1796年4月29日の日付あり〕との関連で容易に理解できる。これは“イエスの宗教を実定的信仰に変えてしまった誘因”は何かを追究しているものであり、彼がカントに従って理性宗教（Vernunftreligion）の立場から聖書を新しく解釈し直すという試みでもある。すなわち「〈イエスの生涯〉は実践的目的をもつもので、若きヘーゲルの民族宗教（Volksreligion）の実現のためのものなのである。〔そこでは〕キリストの教えはカントの道徳的信仰へ（zum moralischen Glauben Kants）と解釈しなおされ、またキリストの実例（Beispielお手本のこと）は理性信仰に情熱と力（Wärme und Kraft）を与えるべきもの¹¹⁾」と考えられたからに他ならない。

ところでヘーゲルはいつもソクラテス（Sokrates）とイエス（Jesus）を

対比して語っているが、これらの論稿でもヘーゲルは「ソクラテスの弟子（die Schülern des Sokrates）とイエスの弟子とを対比している。前者〔ソクラテス〕の場合には、アテネの自由と市民生活と教養が自立の精神（Geist der Selbständigkeit）を発展させた。彼らは真理のために彼らの師を愛したのであって、〔けっして〕ソクラテスに対する忠誠心（Anhänglichkeit）から真理を愛したのではなかった。これと反対の〔イエスの〕弟子たちの態度からは、外的な伝統にしたがって、弟子やその後継者の特殊な立場が生まれた。そしてイエスの死後、固有の教義と儀式をもつ宗派（eine Sekte mit eigentümlichen Lehren und Gebräuchen）が成立^{1 2)}した。こうして実定的教会信仰（positive Kirchenreligion）〔既成の教会信仰〕ができてしまうと、教会法が生れ、理性は圧殺され、権威的信仰のかげで人間蔑視（die Verachtung des Menschen）がおこなわれることになる。だからヘーゲルの意図は“実定的宗教から理性信仰への転換”の必要を訴えることであった。いいかえると——実定的宗教の誤まった発展（die falsche Entwicklung）を批判しつつ民族宗教を導出することなのである。（ヘーゲルがカントの道德信仰の立場に立っていることは、いうまでもなからう）。民族宗教が民族想像力（Volksphantasie＝民族の創造的精神）の深みから出ているかぎり民族宗教は生き続けるだろう——というのが彼の意図であった。この場合、ヘーゲルはギリシア人の宗教の本質から、つまり人間の歴史的行程のなかから生れたものだという前提をもっている。ということは宗教とは、人間の側からの神の意識（また神の認識）の歴史的段階だということになる。われわれはここでヘーゲルの素晴らしい歴史意識に注目すべきである。★

★ ローゼン克蘭ツによると——ヘーゲルはすでにギムナジウムで熱心に歴史を勉強した。“実用的な歴史とは、そもそも何であるか”という間に対して彼は自分で解答を与えようとしたのだ。……彼は戦闘や人名の羅列などに重きをおかなかったからである。（ローゼン克蘭ツ『ヘーゲル伝』邦訳73ページ）

表 2

1793年春	アシニヤ乱発、食糧危機
1・21	国王の処刑
2・1	イギリスへの宣戦
2・24~26	パリ食料暴動
3・10	革命裁判所設置、ヴァンデの反乱
4・11	アシニヤの強制通用
5・4	穀物の最高価格制
5・31~6・2	パリ民衆の蜂起、ジロンド派指導者の追放
6・24	「共和国一年の憲法」可決
7	食糧危機、アシニヤ下落
7・27	ロベスピエール公安委員会参加
9・4-5	エベール派の蜂起
9・11	革命軍の創設
9・29	最高価格法
10~11	非キリスト教化運動
1794・2~3	ヴァントーズ法可決
3・24	エベール派処刑
4・5	ダントン派処刑
6・8	最高存在の祝祭
7・27	ロベスピエール派の没落（テルミドール9日）
12・24	最高価格法の廃止
1795年春	アシニヤ急落、物価の高騰、食糧不足
4・1	ジェルミナール12日の事件
5・20-23	ブレリアル1-4日の事件
10・4-6	ヴァンデミエール12-14日の事件
10・26	国民公会解散、総裁政府成立
1796・3・10	アシニヤ廃止
5・10	バブーフ派の陰謀発覚、逮捕
1797・2~3	バブーフ派の裁判、処刑

（出所）G. Rude, Appendix.

ヘーゲルは1794年には、改めてカントに没頭する。次いでフィヒテの『知識学』を研究した。

その頃、ヘーゲルの耳にとどいて来たのは左表2のようなフランス革命の進転のニュースであった。「フランスでは、テルミドール反動以後の激動の展開過程から、ますますハッキリと強い国民国家の輪郭が浮かび上って」くる。しかもフランスという舞台上「歴史の客観的過程がもたらしたものは、ルソーの理性国家でもなく、いわんやカントやフィヒテの意味する“人倫的な共同社会”でもない。そこで実現しているものは、“生の分裂”（人間の殺し合い）の新たな姿であり、これまで見たこともない複雑に入り乱れた個人と社会との矛盾の一形態¹³⁾」であった。つまりヘーゲルは現実問題と対決するに及んでカント（どころかルソー

さえも）やフィヒテの限界を感じざるをえなくなっていく。その結果、ヘーゲルは精神的危機を迎えることになる。（妹の報告によれば——ヘーゲルは甚しく内向的になっており、ほとんど陰うつともいふべき状態だったという。）その時ヘーゲルを救出してくれたのは、親友ヘルダーリンの1796年10月26日付の“フランクフルトに来ないか”という勧誘の手紙であった。こうしてヘーゲルはヘルダーリンに誘われるままにフランクフル

ト・アム・マインに転出することになる。

もう1つ。この時期のヘーゲルについて述べておくべきことは——この時期のヘーゲルがギボン（Gibbon）を読み感銘を受けていることである。

（注．マルサスがギボンを読んだのは1788年である。）★

★ 史家ギボン（Edward Gibbon 1737-94）の『ローマ帝国衰亡史』は第1巻を1776年に、第2巻および第3巻を1781年に出している。南先生はマルサスに与えたギボンの影響について「私は信ずる。マルサスはこの尨大な歴史書から“一般歴史の若干の知識”を得たに止まらなかった。彼は人間歴史の見方を、観察の方法を体得したのである。端的にいうなら、マルサスは“人口の増加”という根本事実に結びつけて、人間歴史を解釈しようとする独得の見地〔人口史観のこと〕を発見しつつあった」（南亮三郎『人口原理の確立者』37ページ）、「マルサスの歴史的興味はギボンによって呼び起され、後年（1803年）『人口の原理』第2版を著わすさいに、他の豊富な資料とともに“ギボン”が融け込んで来たものと想像される」（南亮三郎『人口学総論』235ページ）と述べておられるが、ヘーゲルもこの時期に（1794年頃か）ギボンを読んで、彼独得の歴史観を身につけたものと思われる。ただしマルサスが『ローマ帝国衰亡史』を読了したのは1788年だから、マルサスの方が6年くらい早い。

（4）フランクフルト時代（1797-1800）

3年余のベルン滞在ののち1797年1月中旬、ヘルダーリンの口添えでフランクフルト・アム・マインのロースマルクト（馬市）近在の豪商ゴーゲル家（Die Familie Gogel）の家庭教師となった。彼が渴望していた豊富な文献のほか、これまでより多い余暇と社交の機会をえることになる。彼はここで4ヵ年を生活する。彼が27歳から30歳にいたるまでの時期である。★

★ すでに1796年以来、当地で銀行家ゴンタルト（Gontard）家の家庭教師をしていたヘルダーリンがヘーゲルのために、同じフランクフルトの商家に家庭教師の地位を見付けて世話してくれたからである。ヘーゲルと就職先のゴーゲル家との関係はスイスにおけるシュタイガー家との関係に較べると著しく良好だったようである。ヘーゲルとヘルダーリンは1797年の初めに再会し、ヘーゲルの

生活にも活気が出て来た。

ヘーゲルがフランクフルトに現われた時期では、彼は未だカント主義者——カントの倫理思想の限界を自覚しつつあったが——であった。ところが、この地でヘーゲルは親友ヘルダーリンの悲劇的な恋愛問題——さらには彼の破滅という現実を目撃することになる。「ここでヘルダーリンを見舞った悲劇は、それを目撃したであろうヘーゲルの心に重大な衝撃を与え、この地で行われる彼の世界観の方向決定に深い影響を及ぼしていった¹⁴⁾」ものであった。つまりヘーゲルは彼の親友ヘルダーリンを打倒した“運命の力”をこの地で目のあたりに見ることになる。そのことは彼の心を奥底から動かし、人間の業（ごう）や性（さが）に関する真剣な思索へと彼を促したに違いない。つまり現実にはヘーゲルにとって、親友の“恋愛とその運命”という格好で彼を襲って、彼の思索に挑戦していったものであろう。この時期にヘーゲルがカント哲学について、実際に思索する場合の理論として——必ずしも正しからず、という洞察をえたのも当然であったろう。★

★ カントの実践理性の法則は、あらゆる理性的存在者に“絶対に無条件的に定言命法”（schlechthin, unbedingte “kategorische” Imperative）として妥当すべきものとして、つまり人間は実践理性にしたがって行為すべし——と説く。そうするとヘーゲルの親友ヘルダーリンのようなゴントアルト夫人に対する純粋な“愛”が説明できなくなる。

彼は、いまやキリスト教の神髄をもはやカントのなかに見いだすこともできなくなり——「この時期の研究全体を通じて“カントに対する戦い”（ein Kampf gegen Kant）¹⁵⁾」が始められていくことになる。そして“神は愛である”といわれるが“愛”とは“区別化であり、また区別の止揚なのだ”という思惟がヘーゲルの脳裡に宿るようになる。カント批判として、ま

ず、「カントによれば〔聖書に述べられているような〕事実 (Tatsache), 教義 (Dogma), 信仰箇条 (Glaubensartikel) それ自体は何ものでもなく, ただ道徳的な宗教理念 (die moralische religiöse Idee) が表現されているにすぎない。こういった原理が最も苛酷な厳格さで貫かれることで, 聖書の内容は, その関連でのみ価値あるものとなっている。したがって人間は, 厳格な命令に結びつけて〔義務として〕——裁判官の前に立って弁明を求められる者のように, たえず自己を検証しなければならないものとされており……ユダヤ教からキリスト教的宗教心の形態にいたるまでの歴史的経過がまったく述べられていない¹⁶⁾」こと。つまり, カントのキリスト教解釈は倫理面だけで宗教史の面には全く触れていないということ。またその倫理思想にしても, きわめて形式的で一般的なものであること (ヘルダーリンのスゼッテ夫人に対する純粹“愛”, “灼熱の愛 (durchglühete Liebe)”も単に人妻に対する不倫一般として形式的に片付けられてしまう) ——から, カント批判が始まっていった。この時期にヘーゲルが“キリスト教対ユダヤ教”の歴史的関連を研究していった理由はここ (=カント批判) にあったのである。

ところで, この時期のヘーゲルの草稿について述べておく必要がある。ヘーゲルが1797年1月中旬, フランクフルトに到着するや, ヘルダーリンと親交を重ねつつ, 思索を深めて一連の草稿をまとめていったが, その草稿の1つは, のちにヘルマン・ノール (H. Nohr) によって「キリスト教の精神とその運命」(Der Geist des Christentums und sein Schicksal) と名付けられたものである。もう1つは, 1800年9月14日に攔筆されたことがわかっている「フランクフルト体系断片」(Das Frankfurter Systemfragment) (以下「断片」という) の草稿である。ルカーチの解説によると——“キリスト教の精神とその運命”から“断片”までの間に“どのような準備がなされたのか”もわからないし, “具体的な進行過程を跡づけること”などは到底できないが——彼の哲学的な根本思想である“宗教的生” (religiöses

Leben)「哲学として生命を考察する」に頂点をおくという考えと、“ヘーゲルの弁証法的方法”が高い段階に達しているのが認められるという意味で貴重な文献である。「キリスト教の精神とその運命」は「ブルジョア社会の問題をそこに生きている人間個人の立場から提起」(Lukács, S. 239)したもので「個人の生 (das individuelle Leben) をいかにして有意義にうち立て、またこれを全うすることができるか」(S. 240)という視点からキリスト教倫理観との対決がヘーゲルの思索の中心になっている。結論的には「人間的諸関係が多様化すればするほど——つまりブルジョア社会が発展すればするほど、キリスト教の基本的矛盾はますます激化」(S. 242)するから「キリスト教区 (die christliche Gemeinde) は歴史の進歩とともに、社会の諸要求と対決しなければならない」(S. 244) 運命をもつという趣旨を述べたものである。いっぽう「断片」の方では「扱われているのは生の問題 (die Frage des Lebens), 生ける個人とそれを囲む世界との関係である……人間の外界との連関的、有機的自己法則的な性格 (Der zusammenhängende, organisch eigengesetzliche Charakter der Äussenwelt des Menschen) がハッキリと表現」(S. 276)されている。ここでは「生はある全体性 (Totalität) の他の全体性との関係」(S. 278)として示される。つまり「人間は……彼の個体的生の無限性 (die Unendlichkeit der individuellen Leben) とは別のものである限りにおいて、個体的生 (ein individuelles Leben)」(S. 278)であるにすぎず、すべての個体とは、ただ“生の表現” (eine Äusserung des Lebens) として存在しているだけなのだ。だから生の理念は「有限なる生から無限なる生へ (vom Endlichen zum Unendlichen)」(S. 281) 高めることにある。ここには「すでにヘーゲルの弁証法の発展した形態が見られることは明らかで……生命はくり返しより高い段階において再生産されるもの」(S. 286) というヘーゲルのイデーが示されている——と。

われわれはヘーゲルがつねに現実的・具体的問題を課題として思索した哲学者であることを承知しているが、この「断片」に示されている生、

死、再生産という人口学的概念から考えると——彼のいう“有限の生から無限なる生へ”というイデーのうちに、ヘーゲルの人口哲学思想を確認できよう。

もう1つ——この時期のヘーゲルの思想形成にとって、すこぶる重要なことは、ヘーゲルがステュアート Sir James Stuart (1713-80) の『政治経済の原理』を読んで、その独訳に註釈をつけていることである。ルカーチはいう——「ヘーゲルはブルジョア社会との対決を通じて経済学の諸問題と真剣にとりくむにいたった、この時代ではただ1人のドイツの思想家 (der einzige deutsche Denker dieser Zeit) である。しかもこのことは、たんにヘーゲルがイギリス古典派経済学者を詳細に研究した当代ドイツの唯一の主要な思想家であるということのうちに現われているのみでなく、彼の研究はイギリスにおける具体的な経済的諸関係そのもの (die konkreten ökonomischen Verhältnisse in England selbst) にまで及んでいるのである。したがって、まさにこのフランクフルト時代において、ヘーゲルの国際的視野が¹⁸⁾広がっていった」のだと。★

★ マルサスがステュアートの『政治経済の原理』を読んだのは1798年の初版から1803年の第2版の間の時期である。というのはマルサスの第2版の序文で初めてステュアートの名前が出てくるからである。ヘーゲルがステュアートを読んで註釈をつけたのは1799年2月19日から5月16日の間となっているから、ヘーゲルもマルサスもほぼ同じ頃ステュアートの『原理』を読んだものと思われる。

ステュアートの『政治経済の原理』は第1篇「人口と農業について」、第2篇「商業と工業について」、第3篇「貨幣と铸貨について」、第4篇「信用と負債について」、第5篇「祖税と租税収入の適切な運用について」の全5篇からなっているが——本書が巻頭第1篇「人口と農業について」(Book 1, Of Population and Agriculture) に、人口理論において、“人口”を詳しく論述していることは、すこぶる重要である。ステュアートの著作が経済的

人口論の代表作とみなされるゆえんでもあるのだが——ヘーゲルはこの書物から、イギリスの経済発展について学びとり、そのことが彼の歴史構想、彼の世界観の根本的構成要素を形成することになるのである。というのはスチュアートの『政治経済の原理』には“人口に関する波動（Oscillation）の理論”と名づけるべきものの最初の表現がみられるからである。スチュアートの『政治経済の原理』は——南先生はいう「それは量において彼以前のあらゆる人口理論的述作を凌いでいるばかりでなく、叙述は妙を得、分析は綿密であって、すくなくとも人口論に関するかぎりこの世紀の最高所産たる榮譽に値するであろう——スチュアートは何ゆえに人口の考察をもって『原理』の叙述を始めたか。それは国民経済の全機構を単純なものから複雑なものへの発達過程に応じて観察しようがために、まず最も単純な“ゆりかごの社会”を仮定して推論する。そしてその根本的基礎が人口と農業だという考え方から出ているのであり……人口はその“自然的作用”によって食物量との“比例”を破り、その結果人口の大きな部分は“一掃”され、やがてまた“以前の水準”に回復するという。ここには実に人口に関する“波動”（Oscillation）の理論と名づけるべきものの最初の表現がある¹⁹⁾」のだと。

この波動の理論の発見はヘーゲルにとって（マルサスにとっても同じく）、歴史観形成にとって重要な意味をもつ。というのは世界史は“ある時は元気なく爬行し、ある時は狂暴に疾駆する人類の発展過程”なのだという認識を与えるからである。人間の社会的生活（das gesellschaftliche Leben）というものは、1つの運動過程（Bewegungsprozess）を辿るもので、絶えざる変形（fortwährende Umbildung）と違った形で再現（Widerstehen in veränderter Form）するという交互作用を繰り返す波動現象であるという認識を与えるからである。“波動”（Oscillation）——まさしく、かかるものの全体として（eben als ein solches Zusammenhang）、歴史は把握さるべきものという認識を与えたからである。

(5) イエナ時代 (1801-1807)

1799年1月14日、ヘーゲルの父が死ぬ。その後、彼は遺産を得たので、もはや家庭教師でなくて、彼個人としての学問の世界に専念できるような経済的条件をえた。そこで彼はシェリングが1798年以来、教鞭をとっていたイエナに赴くことを決意した。(シェリングはすでにゲーテの推薦をうけて正教授になっていた)。この頃は、ヘーゲルとシェリングの対立は勿論なく、シェリングはヘーゲルの頼みに快く応じて「廻り道をせず直ちにイエナへ来るよう、そしてひとまず自分のところに住み込むようヘーゲルに勧めた」²⁰⁾くらいで、信頼する友としてヘーゲルに手紙を書いている。当時のイエナというと「この大学でシラー (Schiller) が歴史学の教授をしていた時代でありフィヒテ (Fichte) とシェリング (Schelling) が哲学を教えティーク (Tieck) やノヴァーリス (Novalis) やシュレーゲル兄弟 (die Schlegels) などのロマン主義者たちがイエナで中心人物となっていた時代であって……当時のイエナは精神上的の中心地 (das geistige Zentrum)」²¹⁾であり、率直に言って「ドイツ哲学の首都はイエナ」²²⁾であった。ヘーゲルは、イエナにつくと「ドイツ憲法にかんする著作」(Die Schrift über die Verfassung Deutschlands) を書き進めながら1801年7月『フィヒテとシェリングの哲学体系の相違』(Differenz des Fichteschen und Schellingschen Systems) という処女論文を発表。★

★ フィヒテの主観的観念論から生れたシェリングの客観的観念論が新しい哲学として紹介されている。またヘーゲル自身がシェリングの陣営に属していることを宣言している。

1801年8月27日、31歳の誕生日に「遊星の軌道について」(De orbitis planetorum) というラテン語の論文で教授資格をうけた。したがって、同年10月には私講師 (Privatdozent) となって最初の講義を始める。翌1802年にはシェリングと協同して『哲学批判雑誌』(Kritisches Journal der

Philosophie 1802-3, 2 巻本, 各巻 3 分冊）を発行した。〔ただし共同執筆という体裁になっているが, 収録論文はほとんどヘーゲルがひとりで書いている (F. Wiedmann, S. 32)〕。また講義のために『人倫の体系』(System der Sittlichkeit) の草案を作成したのは1802-03年の頃であった。1803年, シェリングはヴュルツブルク (Würzburg) の大学から招聘を受けたためイエナを去って行ってしまふ。ヘーゲルはゲーテの推薦でイエナ大学の助教授となることができた。その頃からヘーゲルは彼にとって最初の独立的大著の執筆にとりかかる。これこそ, ヘーゲル体系の序論といわれる『精神現象学』(Phänomenologie des Geistes, 1807) であり, ナポレオン軍とのイエナにおける決戦の前夜に完成されたものであった。戦争の勃発を恐れてヘーゲルがイエナを去ったとき彼は『精神現象学』の原稿を携えていった。(出版は1807年4月)★

★ 1806年には, 千年にわたった神聖ローマ帝国を解体せしめ, 続いてプロイセンと一戦を交えるべく, ナポレオン軍は1806年10月13日にイエナに侵入してきた。まさしくヘーゲルが『精神現象学』と悪戦苦闘していた日々の頃である。戦闘は彼の身辺に迫っていた。

一方, 当時のマルサスについていうと——1803年6月『人口原理論』第2版を公刊(37歳), 1804年4月12日結婚(38歳), 1805年春, 東印度大学の教授就任(39歳), 1806年には『人口原理論』の第3版を公刊している。

ヘーゲルは1806年10月13日付, ニートハンマー (Friedrich Immanuel Niethammer) 〔同郷の友人〕あてに手紙を書く, 「皇帝——この世界精神——が馬上ゆたかに, 市街を通り陣地偵察に出かけて行くのを僕は見た」と。彼がナポレオンを眺めて“馬上の世界精神”(Weltgeist zu Pferde)を感じたのは事実である。この場合, ヘーゲルのいう英雄とは“世界精神の具体的な現実性”を意味する。というのは, のちの彼の『歴史哲学講義』(Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte, Reclam, 1980. 武市健人邦訳, 岩波文庫)をみると「精神はわれわれの見る舞台の上では, その

最も具体的な現実性であるところの世界史の主役」(S. 58, 邦訳75ページ)をなしていると述べ、「ローマの独裁 (die Alleinherrschaft Roms) は、同時にローマ史と世界史とにおける必然的な使命 (notwendige Bestimmung) だったのである。その意味で、この独裁は単に彼れ1個の利益というにとどまらず、むしろその時代の必然的要求を充し、実現したところの無意識的な衝動であった。史上の大人物とは、すなわち、このように彼自身の個人的目的 (eigne partikuläre Zwecke) が世界精神の意志 (Wille des Weltgeistes) である実体的なものを同時に含むような人びと」(S. 74-5, 邦訳96-7ページ) のことであるという。だから彼らを“英雄” (Heroen) と呼ぶことができるけれど「[世界精神にとって]、その目的が成就された暁には、彼らは実のな^みくなったサヤ (die leeren Hülsen des Kernes) のように凋落する。彼らは或いはアレクサンドロス (Alexander) のように夭折し、或いはカエサル (Cäsar) のように刺し殺され、或いはナポレオンのようにセント・ヘレナ (St. Helena) に流されれしまう」(S. 76, 邦訳98ページ) のだと、ハッキリ述べている。つまり、世界精神は個人を通じて、歴史的に必然的なものを生じさせるような“理性の狡智” (List der Vernunft) をもっているものなのだ、ということである。ナポレオンが偉大なのでなくて、ナポレオンを道具として顕現している世界精神が崇高なのである。だからこそヘーゲルはナポレオンを見て“馬上の世界精神”と感嘆したのである。(カントがすでに人口の波動現象を記述しているが、ヘーゲルにおいては人口の波動現象も世界史の主役たる世界精神の具体的な顕現として示されていく)。

ところで『精神現象学』は未完成であり、不完全ではあるが、やがて後のヘーゲル哲学の完成に至る大きな足がかりとなる書物である。しかし本書の執筆当時の戦乱の事情もあってヘーゲル自身が混乱していた点もあるといわれている。本書は頗る難解で「“序文” から先へ進んだ人はほとんどいない」(G. Biedermann) とか「これを始めから終わりまでただ読み通

した者でも数えるほどしかない」（W. Windelband）といわれているくらい難解な書物であるが——しかし、ルカーチによると、『精神現象学』は「その課題が個体による類的経験の習得（die Aneignung der Gattungserfahrungen durch das Individuum）であることを理解するならば、現象学の構造を理解することは、けっして一見そう思われるほど困難ではない²³⁾」と述べ、「アリストテレスは、人間は“社会的動物”であるという偉大な真理を定式化したが、ヘーゲルはこの真理を現象学において、人間はまた“歴史的動物”であるというように具体化した²⁴⁾」だけなのだという。とにかく『現象学』とともに、ヘーゲルの体系の準備時代は終り、「世界史的に重要な人物としてのヘーゲルは、すでにこの著作のなかで完成したものとして、われわれの前に立つ²⁵⁾」のである。

ところで『現象学』については、1807年1月税稿した“序文”（それはヘーゲルとシェリングを決定的に不和にしたものだが）のなかの文章が問題になる。「そこにはシェリングという名前こそ明記してないが、一目でそれとハッキリわかる仕方で、シェリングの根本思想について痛烈な皮肉や諷刺が嘲笑をこめて投げつけられているからである。たとえばシェリングの同一哲学（Identitätsphilosophie）は“すべての牛が黒く見える夜”のようなものだとか、そこでは絶対者が“ピストルから発射されるように”突如として現われるとかいう手きびしい評言が随所にある……彼〔シェリング〕はこの“序説”を自分に対する個人攻撃と考えざるを得なかった。ヘーゲルに対する信頼の念が厚かっただけに、これはシェリングの眼には許しがたい背信と映った²⁶⁾」のであり、以後2人の仲は急速に冷え、友情は決裂する。「2人のどちらもが、その後22年間、会話を再開することも、古い友情を新たに開始することも²⁷⁾」なかった。2人は——偶然とはいえ——なお数回は逢ってはいるのだが、「1821年以後、シェリングは講義でヘーゲルに反対を表明し、年ごとに批判と攻撃（Kritik und Polemik）を強めて²⁸⁾」いった。★

★ ルカーチの「精神現象学の構造」と題する解説によると——『精神現象学』の出発点を構成するものは必然的に個体の自然的、日常的意識である。個体はまだ諸段階を認識された歴史として経験するのではなく、さまざまな人間の運命の継起として意識する。第2の段階では、個体はいまや歴史を現実的歴史として認識し、社会とその発展をもはや死せるもの、あるいは、無気味な運命としてではなく、人間自身の活動、実践の所産として認識する。第3の段階においては、もはや現実的歴史ではなくて、現実を十全に把握しようとする人類の努力の1種の総括で、この世界の十全な思想的認識と弁証法の認識への道の偉大な段階をあらわしているのだ、と。つまり、現象学は——ヘーゲルのいう“人間それは精神であるがゆえに”(der Mensch, da er Geist ist) (1816.10.29. ハイデルベルク就任講演) ——から考え合わせると、具体的な人間について、その人間意識の歴史的発展の弁証法的過程を叙述したものと考えられよう。

(6) イエナからベルリンまで (1806-1816)

1806年10月、既に述べたようにヘーゲルの生活は荒々しく中断された。ナポレオンがイエナ会戦後、同市を占領したからである。その結果、混乱がいたるところで起る。ヘーゲルは『精神現象学』の原稿を携えて下宿を立ち退かざるをえなくなってしまう。ヘーゲルは再び勤め口を探した。父から相続した財産も底をついてしまったし、『哲学批判雑誌』はもう発刊されていなかった。1807年に『精神現象学』が公刊された時には、ヘーゲルの名声は高まることになるが、(それとても公衆に行きわたった部数は僅か100冊あるかないくらい——ローゼングランツ)、こんな混乱した時代では、他の大学に任命される希望なんか、まったくもちえない状況であった。その時、友人のニートハンマーが日刊紙『バンベルク新聞』(Bamberger Zeitung)の編集の口を見つけてくれた。★

★ ニートハンマー (F. I. Niethammer) は上級視学官 (Oberschulrat) であり、また公共教育機関関係局の有力委員でミュンヘンにいた。“ニートハンマー教育計画”(哲学を異常なほど重視)を作成した人。

ヘーゲルはこの好機にとびついた。「喜んで希望にあふれて引き受けた」(Lukács, S. 135)。1807年3月のことであった。しかし新聞編集の仕事は彼には不得意であったのみならず——彼はナポレオンの圧制的な占領政策、また厳しい新聞検閲を体験せざるをえなくなる。ヘーゲルは20ヵ月（1808年11月まで）編集の仕事を続けたが、バイエルンの出版、言論の不自由さにあきあきして、きびしい検閲制度下の編集を“新聞のくびき”(Zeitungsjoch) とか“新聞奴隸船”(Zeitungsgaleere) とさえ呼んだ。その時、1808年晩秋のことだが——ニートハンマーが彼のためにニュルンベルクのあるギムナジウムの校長兼哲学教授 (Professor und Rector des Ägiedengymnasium) の地位を探してきてくれた。就任は1808年11月4日。(バンベルグ新聞はヘーゲルがニュルンベルクに移ったあと発行禁止となる)。★

★ 校長職には哲学の授業を行うという規定になっていた。またもしギムナジウムの授業がなかったとすれば、ヘーゲルの深遠な思索も、それが実際に達したほどの偉大な明晰さをおそらく獲得しなかったであろう。(ローゼンクランツ)

ヘーゲルがギムナジウムの上級の生徒たちに哲学を教えることは彼の哲学の勉強になったばかりでなく、彼の哲学をわかり易く表現する仕方を身につけさせることにもなった。その間の講義がいわゆる『哲学序説』(Philosophische Propädeutik) である。彼は8年間校長としての職務を果しつつ、彼の第2番目の大著『大論理学』(Wissenschaft der Logik, 1812-16) を公刊した。この著作によって、1816年10月ヘーゲルはハイデルベルク大学教授となった(46歳時)。★

★ 『論理学』の最初の2巻は1812年、1813年に、最後の第3巻は1816年に出版。なおヘーゲルはギムナジウム校長時代にマリア・フォン・トゥヒャー (Maria von Tucher) (20歳) と1811年9月16日結婚している。(ヘーゲル41歳時)。

ハイデルベルク大学に着任すると、その最初の年に彼は彼の全体系の叙述、すなわち『エンチクロペディー』(Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse)の講義用の執筆をした。これが翌1817年春に公刊されたものである(ヘーゲル47歳時)。ただしハイデルベルクにいた期間は僅か2ヵ年(1816-18)であった。

当時フランスでは、1812年、ナポレオンはモスクワ遠征に敗れ、1815年6月22日退位。1815年、神聖同盟成立。またイギリスでは、マルサスが『人口原理論』第4版(1807年)を公刊している。

(7) ベルリン時代(1818-1831)

1818年10月ヘーゲルはベルリン大学の教授に就任。プロイセンの文部大臣アルテンシュタイン(Unterrichtsminister, Sigmund von Altenstein 1770-1840)が、フィヒテの死去以来空席となっていた講座をヘーゲルに要請したからである。★

★ ヘーゲルの就任はあくまで哲学による学生思想善導という国家目的に沿ったものであり、ヘーゲルの意図のなかには国家権力の番犬になろうという卑俗な野心などは毛頭含まれていなかった(中埜 肇114ページ)。ヘーゲルは——元来がシュヴァーベンの人間であるから、この地方の人間の常として——本当は南部ドイツを好むものだが、ベルリンの方がこの南部の諸都市よりも自由で、哲学と哲学的活動と学問的教養とには好都合な都会であった。それがすべてを決定する要因であった(ローゼンクランツ)。1815年以降、プロイセンは近代化への志向——フランスを模範に——をもち続けた唯一の国であった。ヘーゲルがアルテンシュタインの招聘に応じたのもプロイセンに対するこの期待からであった。(上妻 精氏)

1815年6月12日、イエナ大学に“ドイツ学生連盟”(Burschenschaft, ドイッチェ・ブルシェンシャフト)が結成されていたが、1817年10月には、この連盟が中心となって、ドイツ各地の大学の学生を招いてヴァルトブルクの森で祭典を催した。祭典終了後、学生たちは“非ドイツ的”とみられ

る書物を焼いて氣勢をあげたりした。「この祭典の直後に文部大臣になったアルテンシュタインは焚書事件に見られるような過激な学生の行動を憂慮し、これに対処するには権力によって弾圧するのではなく、学問と教育とによって学生の情熱を正しい方向に導くべきであると考えた。そしてこういう思想善導は何よりも哲学によって行なわれるべきであるとし、しかもこの目的に最も良く合致する哲学を求めて、ヘーゲルのうちにそれを見出した²⁹⁾」のであり、「ヘーゲルの就任はあくまでも哲学による学生の思想善導という国家目的に沿ったものであり、したがってヘーゲルの哲学はプロイセンの国家哲学となるべきことを暗に要請されていた³⁰⁾」ということである。★

★ プロイセンの国家哲学者（Preussischer Staatsphilosoph）といってもプロイセンの御用哲学というふうに誤解してはならない。ヘーゲル哲学は、革命の代数学（die Algebra der Revolution）といわれているくらいであって、断じて保守反動的な哲学などではない。ヘーゲルは国民の自由を実現せしめる国家こそ、はじめて現在の歴史的使命を果しうるものと考えて、プロイセンの招聘に応じたのである。

ベルリン時代のヘーゲルは全盛期（Ruhmeszeit）を迎える。多くの学徒に取りまかれて、昇り行く自己の名声の輝きを楽しみながら彼の研究生活は“ますます豊かな影響力をもちつつ繰り広げられて”いった。ヘーゲル学派（die Hegelsche Schule）はカントも及ばなかったような勢力となった。1827年に創刊された「学的批判年報」（Jahrbücher für wissenschaftliche Kritik）はヘーゲル学派の機関紙である。1821年『法哲学』（Grundlinien der Philosophie des Rechts）を公刊。

1831年11月14日（月）死去。ヘーゲルは安らかに、しかも名声の絶頂で、“多数の門下生たちの敬慕のまと”となりつつ、61歳で死んだ。こうして“哲学の時代”（die philosophische Zeit）はヘーゲルの死後まもなく

終った。彼の講義は死後、弟子たちによって出版された。完成された『ヘーゲル著作集』（全18巻）は1832年から1845年にわたりベルリンで公刊された。

- ★ マルサスもこの時期は絶頂期で、1815年には『人口原理論』第5版を出版。1819年には王立科学協会の会員に選出され、1820年には『経済学原理』の初版を出しているし、1826年には『人口原理論』の第6版を公刊している。

Ⅱ ヘーゲルと人口哲学

ヘーゲルは驚くべき博学の哲学者であり、「百科全書的な頭脳（ein enzyklopädischer Kopf）であり，総合の天才（ein Genie in der Annexion）であり，理論と現実には貪欲な哲学者であって，その体系のなかに，アリストテレス以来の誰とも比較を絶するほどの巨大な領域を包括している³¹⁾」から——この“較ぶものなき巨大な領域”（ein unvergleichlich grösses Gebiet）のうち——人口学に関係ある点のみを取りあげて述べてみることにしよう。ヘーゲル哲学がつねに具体的なものの思索であって，決して“現実から遊離”した抽象的・神秘的思索ではないことは前節で述べた。「ヘーゲルにとっては，つねに社会の活動性・実践性（die Aktivität, die Praxis der Gesellschaft）が研究の出発点であり，また，その中心の対象（zentrale Gegenstand）³²⁾」であったのだし，「若きヘーゲルが，従来の狭義における哲学的問題に対してかなり無関心（gleichgültig）[どうでもいいと思うこと]であったという驚くべき事実についてはすでに述べた。ヘーゲルがみずからいうように「哲学は^{.....}理性的なものの根本を究明することであり，それだからこそ，^{.....}現在のなものや^{.....}現実的なものを把握すること（das Erfassen des Gegenwärtigen und Wirklichen）であって，^{.....}彼岸的なものをうち立てることではない（nicht das Aufstellen eines Jenseitigen）³³⁾」と確言している。ヘーゲルを“俗世離れ”（weltabgewandt）の哲学者と考えることは根本的な間違いである。クーノウのいうように

「ヘーゲルがまず初めに哲学上の体系をつくって、そののち、哲学上の望楼（Warte）〔見張り台〕から個々の問題を観察したと考えるなら根本的なマチガイ」——³⁴⁾なのである。事実は全く逆である。たとえば『精神現象学』は「“生”（レーベン）の旅の出発」（ビーダーマン）といわれているが、現実から遊離したところに生命や精神を求めても空しい努力であることは容易にわかるであろう。哲学はそんな抽象的思弁の学ではないとして、現実のなかに理性がみずからを現わしているのだと主張していればこそ「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である」（Was vernünftig ist, das ist wirklich; und das wirklich ist, das ist vernünftig.）といえるのである。彼にあっては哲学は彼岸的な学問ではなく、いつも具体的な現実的なものの探究であったのである。

ところで「ヘーゲル哲学を理解しようと思うなら『論理学』か『エンチクロペディー』を読め」という毒舌の大哲学者B. ラッセルに従って、ヘーゲル哲学体系の総括といわれる『大論理学』（Wissenschaft der Logik, 2巻, 1812-16）と『エンチクロペディー』（Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften, 1830）のなかから“生命”（レーベン）に関する歴史的叙述を覗いてみることにしよう。★

★ ただし原文としてG. W. E. Hegel. Wissenschaft der Logik, I, II, Herausgegeben von G. Lasson, 1975とEnzyklopädie der philosophischen Wissenschaften (1830), Herausgegeben von F. Nicolin und O. Pöggeler; Verlag von Felix Meiner, Hamburg, 1975. を用い, 邦訳は武市健人訳『大論理学』（グロツクナー版, ラッソン版と英訳を参照した由）上巻の1と2, 中巻, 下巻（『ヘーゲル全集』6a, 6b, 7, 8）岩波書店刊と檜山欽四郎, 河原栄峰, 塩屋竹男共訳『エンチクロペディー』（ニコリン・ペグゲラー版）河出書房新社, 昭和62年を用いた。本文中の傍点は原著者のものである。

ヘーゲルはいう——「生命の理念（Die Idee des Lebens）は全く具体的ないわば実在的な対象に関係するものであるから、論理学の通念からいえ

ば、このような理念を問題にすることは論理学の領域を踏み越えるものであるかのように見える……しかし、その対象を思想と概念の形式の中で把握することを建前とする学問であるかぎり、みな応用論理学（eine angewandte Logik）となるから、どんな学問でも論理学の中に」（Logik, II. S. 413, 邦訳〔下〕266）入ることになる。★

★ ヘーゲルの『論理学』は、これまでの形式論理学のように、たんなる思考形式の学ではない。客観的な事物の運動法則の学なのである。彼は論理的カテゴリーを固定的にとりあつかうことはせず、1つのものから他のものに発展し、全体が有機的な統一をなすものとみている。

「生命そのものは精神にとっては一方では手段であって、そのかぎり精神は生命に対立する。しかし他方では精神は生命的な個体であって、生命は精神の身体である。けれどもまた、他面では、この精神とその生命的な身体性との統一は生命そのものから産れ出て、生命を地盤としながら理想に向って進む」（II. S. 415-6, 邦訳〔下〕269）ものであり、もう1歩立ち入ってみると「生命は即且向自的に絶対的な普遍性（an und für sich absolute *Allgemeinheit*）である」（II. S. 416, 邦訳〔下〕269）ということがわかる。★

★ ヘーゲルは論理的カテゴリーをまず“有”（Sein）から始める。当然“有”から質と量のカテゴリーに言及していく。生命を生命的個体としてみたものが諸個人である。生命ある個人の地上における存続期間が寿命であり、一定地域における諸個人を量として表現したものが人口数である。

しかし「生命は本質的に生物（*Lebendiges*）であり、その直接性からいえば、生けるこの個別体（*dieses Einzelne Lebendige*）である。有限性（die Endlichkeit）とは……生物の可死性（Sterblichkeit）」（Enzykl. S. 185, 邦訳187-8）のことである。★

★ 個体としての生命は可死性があることによって有限性なのである。

また「単純な生命は，……それ自身その客観性の存在根拠（das *Bestehen*）であり，内在的実体（die *immanente Substanz*）」（Ⅱ. S. 417, 邦訳〔下〕270）でもあるのだから「生命は第Ⅰに，生命的個体（*lebendiges Individuum*）として考察されねばならない。生命的個体は，それ自身〔向自的，自立的に〕主観的な全体である……第Ⅱに，生命は生命過程（*Lebensprozess*）である。すなわち生命過程は，この生命の前提を止揚するところにある。すなわち生命に対立する客観性を否定的に見，自分を客観性の力または否定的統一（*negative Einheit*）として実現するところにある。……第Ⅲに，類の過程（*der Prozess der Gattung*）である。すなわち類の過程とは，生命が個別化を止揚し，……新たな個性の生成と最初の直接的個性の死」（S. 417, 邦訳270-1）ということである。★

★ 生ある個体は必ず死ぬ。それは生きとし生けるものは，死（対立概念）を萌芽としてもっているからであり，生命とは生と死の統一，すなわち“有”と“無”（*Nichts*）の統一としての成（*Werden*）である。また生命はたえず自己を否定しながら生き続け自己同一にとどまっている。

「生命体（die *Leiblichkeit*）は身体性（das *Lebendige*）を，はじめは概念と直接的に同一な実在性（*identische Realität*）〔区別できないもの〕をもつ。……生命体のこのような客観性こそ有機体（*Organismus*）」（Ⅱ. S. 419, 邦訳〔下〕273-4）なのである。ここでいう「同一な実在性」とは，個体が自己の生命をもち，これを維持することであり「外面性を〔区別できぬように〕貫通（*durchdringen*）しているもののこと」（Ⅱ. S. 419, 邦訳〔下〕271）である。だから「同一性とは，区別が抽象せられるかぎりでは，形式的同一性あるいは悟性的同一性（*Formelle oder Verstandes-Identität*）であり……あるいはむしろこの形式的同一性を措定すること」

(Enzykl. S. 125, 邦訳128) である。

ところで“有”(あるもの)は必ず“質”と“量”の2つの性質をもつことは既に述べたが——量(Quantität)は必ず連続性と非連続性(分離性)をもつものである。その場合「定量(das Quantum)は変化して他の定量となるものである。この過程は定量がそれ自身において自己矛盾的なもの(sich widersprechend)とせられるところから生ずる……従って定量とは、定量の非限定性(Unbegrenztheit), すなわち無限性(Unendlichkeit)のことでもあり——定量は向自的に規定(für-sich bestimmt zu sein)されている」(I. S. 222, 邦訳〔上巻の2〕63)ものである。★

★ ひとりひとりの個人をみると、確かに非連続的存在であるが、類としての人間は連続的存在であるし、個人としての寿命は有限(非連続)であっても、類としての生命は連続的である。

「生命は個別として(als Einzelnes)ある。〔つまり生命の存続期間も個体数も定量可能〕……個体としての生命は外面的客観性のなかで否定的統一としておかれるから、そこで再生産(Reproduktion)(II. S. 442, 邦訳〔下〕277-8)がおこなわれることになる。再生産によって、個体は個体的な自己同一性を保ち続けることができるのだし「再生産のなかで生命は具体的なものとなり、生命のあるもの(Lebendigkeit)」(II. S. 422, 邦訳〔下〕278)となる。つまり生命として永続できることになる。すなわち「再生産の契機が現われるとともに、生命体(das Lebendige)は、自己関係的な向自有(ein sich auf sich beziehendes Fürsichsein)となる」(II. S. 423, 邦訳〔下〕278)ことができるのだし、また「個体的な自己同一性」(individuelle Identität)(II. S. 422, 邦訳〔下〕278)を保ち続けることができるから「再生産の中で全体という具体的な全体性(konkrete Totalität des Ganzen)として措定」(II. S. 422-3, 邦訳〔下〕278)することが可能となる。

定量というとは——有限的なものの規定 (die Bestimmung der Endlichkeit) と思ってしまうが〔たとえば平均寿命が何歳とか，わが国の総人口が何人とか〕——「じつは無限的なものの規定 (ebenso Bestimmung des Unendlichen)」にすぎない。なぜならば「定量 (das Quantum) は自分の自己外有 (Äusserlichsein)〔外にあること〕によって，はじめて^{●●●●●}定量それ自身^{●●●●●}なのだからである。外面性 (Äusserlichkeit)こそ定量を定量たらしめるところのものであり，定量の本性であるものを構成するところのものである。それゆえに無限累進の中に (im unendlichen Progresse) 定量の^{●●●●●}概念が^{●●●●●}措定される」(I. S. 237, 邦訳〔上の2〕84)のである。だから「生命的個体 (das lebendige Individuum)は，自分自身を^{●●●}向自的に^{●●●}その他在の否定的統一として，すなわち自分自身の基礎として (als die Grundlage seiner selbst) 措定する。こうして個体は理念の現実性となる」(II. S. 426, 邦訳〔下〕283)ものであり，「生物は自分自身において自己を分化し，自ら自己の肉体性を自分の客観に」(Enzykl. S. 186, 邦訳188)する。かくて「^{●●●}類の過程 (der Prozess der Gattung)は^{●●●}類を^{●●●}向自有 (Fürsichsein)へともたらず」(Enzykl. S. 187, 邦訳189)ためのものであり「^{●●●●●●●●●}生命の理念はかくして^{●●●●●●●●●}自由なる^{●●●●●●●●●}向自的類 (freie Gattung für sich selbst)として現存 (Existenz)に」(Enzykl. S. 187, 邦訳189)いたることができるのである。★

★ 生命体を“質”の面からみると——生命体は感受性 (Sensibilität), 興奮性 (Irritabilität), 再生産 (Reproduktion)という3機能をもつ，このうち感受性と興奮性は抽象的な規定であるが，再生産は具体的なものである。しかも再生産がおこなわれることによって，生命体の向自有 (Fürsichsein)としての連続性が保たれる。再生産は不断に自己を回復する過程であり，生命あるものは，このように自分自身の内部において，不断に自己を更新する過程をもつ。

いうまでもなく“類”とは生命的種属(血族)(die lebenden Geschlechter)

の繁殖 (Fortpflanzung) によるものだから「この過程のなかでは、個々の個体は、直接的な実存を止揚して、類の否定的統一の中で死んでいく」(Ⅱ. S. 428, 邦訳〔下〕286) ものであり、「一面では個別的生命の止揚でもあるが、他面では生命の産出 (das Erzeugen) (Ⅱ. S. 428, 邦訳〔下〕286) なのである。したがって類の過程とは「類を向自有へもたらす」ことであり、量的にいうと「量の無限累進」(der quantitative unendliche Progress) ということである。具体的にいうと「生殖 (Begattung) 〔性交〕において、〔生命的個体は〕普遍性であるところの实在性 (Realität) 〔＝類〕を獲得し、理念が向自的になる」(Ⅱ. S. 429, 邦訳〔下〕286) ことができるのであって、これこそ「〔生命にかんする〕認識の理念 (die Idee des Erkennens)」(Ⅱ. S. 429, 邦訳〔下〕286) である。「理念は即且向自的に真なるもの (das Wahre an und für sich) であり、概念と客観性との絶対的統一 (die absolute Einheit)」(Enzykl. S. 182, 邦訳184) であり、しかも「生命の理念は向自的類としての現存」をめざすものなのである。ここに“種の繁殖”(＝人口の増加)をイデーとする彼の哲学思想があり、人口を契機とする彼の歴史観が示されているのを認めることができる。

今回ヘーゲルの歴史観を調べていくうちに、ヘーゲル哲学体系のなかに——『論理学』の生 (レーベン) を論じているところに——亡き南先生が終生の悲願とされた人口哲学 (およびその哲学を礎石とした人口史観) が認められたので、ヘーゲルの叙述の難解さも、筆者みずからの非力も省りみず報告することにした。本章Ⅰでは、ヘーゲルの哲学体系確立にいたる過程 (社会的・政治的背景を含めて) とヘーゲルがフランクフルト時代から早くも“生” (レーベン) について深い関心を抱いていた哲学者であることを述べ、Ⅱでは、ヘーゲル哲学における人口哲学と、人口哲学を礎石とする彼の人口史観について述べた。つまり、個人的生命は“うたかたな”“有限な”生命 (ヘーゲル自身の言葉では、はかない霧 nichtiger

Nebel, 幻影 Schatten のようなもの）であるが、類としての生命は、真無限としての、無限累進をめざす“向自有”であり、“自己同一性”を保ち続けるから不滅であり、（たとえ戦争や悪疫流行などによる大量死による人口減少があっても、すぐ元どおりに回復するものであることを歴史は教えている＝歴史的必然性ということ）、個体は類において自己の生命を保持するのだから、個人的生命は非連続であっても個人を結びつけている人間の類的生命は連続性をもつということ、このようにヘーゲルは“つながりとつながりなきものとのつながり”をみごとに歴史的弁証法としてわれわれに教示していること——を述べたつもりである。

ただし、本章ではヘーゲルの人口哲学について述べただけであって、いわば人口哲学の先駆的な1つの例を述べただけである。同時代人でありながら——同じく弁証法的歴史観を抱きつつも——ヘーゲルとは違った哲学思想を構想した人物こそマルサスなのである。というのはヘーゲルの場合では、人口の無限累進をめざすことが彼の人口哲学の礎石であった。しかし人口増加は同時に「不断に社会の下層階級を困悪裡に陥れ、そして彼らの状態のいかなる永久的改善をも妨げる傾向をもつ」（マルサス）という反面をもつものだからである。だからマルサスの場合では「善であるものが悪であり、しかもこの悪を根底から取り除こうとすればやがてまた善そのものが根底から破壊される」（南先生）という“生”の無限相克（無限彷徨）の概念が彼の人口哲学の主導概念となっていく。

注 1) J. Hyppolite, *Studies on Marx and Hegel*, Heinemann Educational Books Ltd., 1969, p. 70f.

2) 中埜 肇『ヘーゲル』中公新書 昭和46年, 17ページ。

3) K. Rosenkranz, *Georg Wilhelm Friedrich Hegels Leben*. ローゼンクラッツ『ヘーゲル伝』中埜 肇 邦訳 みすず書房 1983年, 30-31ページ。傍点原著者。

4) W. Dilthey, *Die Jugendgeschichte Hegels*, Gesammelte Schriften, IV Band, B. G. Teubner Verlagsgesellschaft, 1963, S. 7.

5) K. Fischer, *Hegels Leben, Werke und Lehre*, Kraus Reprint, 1973,

- S. 7. 玉井, 磯江 邦訳 勁草書房 1971年, 18ページ。
- 6) F. Wiedmann, *W. F. Hegel*, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg, 1965, S. 19.
 - 7) G. Lukács, *Der junge Hegel*, G. Lukács Werke, Band 8. Hermann Luchterhand Verlag GmbH, 1967, S. 207.
 - 8) D. Henrich, *Hegel in Kontext*, Suhrkamp Verlag, 1971. 中埜 肇 邦訳, 57ページ。
 - 9) W. Dilthey, *Die Jugendgeschichte Hegels*, *op. cit.*, S. 14.
 - 10) F. Wiedmann, *G. W. F. Hegel*, *op. cit.*, S. 16.
 - 11) W. Dilthey, *Die Jugendgeschichte Hegels*, *op. cit.*, S. 19.
 - 12) *ibid.*, S. 25.
 - 13) G. Biedermann, *Georg Wilhelm Friedrich Hegel*, Urania-Verlag Leipzig-Jena-Berlin, 1981. 尼寺義弘 邦訳 大月書店, 23ページ。
 - 14) 中埜 肇『ヘーゲル』前掲書 52ページ。
 - 15) W. Dilthey, *Die Jugendgeschichte Hegels*, *op. cit.*, S. 60.
 - 16) *ibid.*, S. 61-3.
 - 17) G. Lukács, *Der Junge Hegel*, *op. cit.*, S. 239ff.
 - 18) *ibid.*, S. 138.
 - 19) 南 亮三郎『人口学総論』前掲書 103-5ページ。
 - 20) F. Wiedmann, *W. F. Hegel*, *op. cit.*, S. 28.
 - 21) H. J. Störig, *Kleine Weltgeschichte der Philosophie*, *op. cit.*, S. 318.
 - 22) F. Wiedmann, *G. W. F. Hegel*, *op. cit.*, S. 28.
 - 23) G. Lukács, *Der Junge Hegel*, *op. cit.*, S. 577.
 - 24) *ibid.*, S. 579.
 - 25) *ibid.*, S. 552.
 - 26) 中埜 肇 前掲書 74-5ページ。
 - 27) F. Wiedmann, *G. W. F. Hegel*, *op. cit.*, S. 108.
 - 28) *ibid.*, S. 108.
 - 29) 中埜 肇 前掲書 113-4ページ。
 - 30) 同書 114ページ。
 - 31) K. Korsch, *Karl Marx*, Europäische Verlagsanstalt, 1967, S. 205.
 - 32) G. Lukács, *Der Junge Hegel*, *op. cit.*, S. 40.
 - 33) G. W. F. Hegel, *Grundlinien der Philosophie des Rechts, oder Naturrecht und Staatswissenschaft im Grundrisse*, Philipp Reclam Jun. Stuttgart, 1981. Vorrede, S. 55-6.
 - 34) H. Cunow, *Die Marxische Geschichts-Gesellschafts-und Staatstheorie*, *op. cit.*, S. 226.